

『日蓄ニュース』と『コロムビア・ニュース』の希少性

『日蓄ニュース』が刊行された目的については、昭和五年（一九三〇）四月の第一巻第一号で「日蓄ニュースの使命は日蓄四大製品を取扱つて居らるゝ大売捌店、特約店と会社とを打つて一丸となし、以つて更に一層完全なる理解の下に一致協力、共存共栄の精神を以つて此の我が多望なる業界の進歩発達のために邁進するに当り其の一助たらんとするものであります」と明記している。つまり、日本コロムビアと、その商品を販売する店舗との意思疎通を図り、レコード産業界の発展を企図した情報誌であった。

この情報誌は右の説明文からすると、コロムビアの特約店などのレコード店に配布されたと考えるのが自然であり、それらを除くとコロムビアの一部の関係者に渡されたに過ぎないだろう。そのため、音楽関係の史料を収集している音楽大学図書館や研究機関でも所蔵しているところは皆無に等しい。今回の『日蓄ニュース』と『コロムビア・ニュース』の復刻は、国立国会図書館と日本コロムビア株式会社の所蔵分からなる。国立国会図書館の所蔵分は貴重書のため、閲覧およびコピーなどに制限がある。一方で日本コロムビア株式会社の所蔵分は、一般公開されていない。したがって、今回の『日蓄ニュース』と『コロムビア・ニュース』の復刻版によつて、従来はアクセスが困難で利用しづらかった両史料が広く利用できるようになったのである。

現存する『日蓄ニュース』と『コロムビア・ニュース』から、定期刊行物としての性格について探ると、いくつかの変化が見られる。まず両タイトルが違っていることが大きな変化だが、これは昭和八年一月の第四巻第一号から『コロムビア・ニュース』と改題された。第一巻は四月刊行のため、この年は全九号しかないが、昭和六年の第二巻と同七年（一九三二）の第三巻は毎月発行で全十二号である。昭和八年（一九三三）の第四巻は第十一号が十二月に遅れ、同九年（一九三四）の第五巻は第四号が五月に遅れたことで全十一号しか

ない。昭和十年の第六巻は毎月発行されており全十二号に戻っている。

改題に続く大きな変更は、昭和十一年（一九三六）の第六巻から季刊となっていることである。しかし、年間に四号か五号かはつきりしない。現存号からは第六巻第二号が五月、第四号が九月の発行であり、発行の不規則性が刊行月を特定することを難しくさせている。またこの季刊となった『コロムビア・ニュース』がいつ頃まで刊行されていたかを明確にすることも難しいが、その最終巻の時期については二通りの考え方ができる。

まず一つは、コロムビアが特約店などに配布した販売宣伝用の『コロムビアレコード』（改題『ニツクレコード』）の新譜月報が昭和十九年（一九四四）二月頃まで発行されていた事実からすると、同時期まで継続されていた可能性が考えられる。もう一つは、昭和十四年十月に『コロムビア時報』が創刊されたことで、これを機に『コロムビア・ニュース』が発行されなくなったという考え方である。『コロムビア時報』は昭和十七年十二月の第二十二号で『日蓄時報』と改題されて、同十九年七月の第三十一号まで刊行されている。そして昭和二十一年二月の『日蓄時報』の復刊を経て、同年四月から『コロムビア時報』へと題名が戻り、同二十七年（一九五二）七月の第四十四号まで刊行が確認できる。『コロムビア・ニュース』が『コロムビア時報』へと継続したと考えれば昭和十四年頃までであり、『コロムビア時報』とは別に発行されていたと考えれば同十九年頃までとなる。この点は新たな現存号が出て来こない限りわからない。

コロムビアの専属芸術家の入社情報

昭和歌謡に関する書籍は昭和時代から多数存在するが、歌手、作詞家、作曲家の正確な情報を記しているとは限らない。むしろいい加減な記述に溢れ

ており、孫引きした段階で大きな事実誤認をしよう危険性が高い。『日蓄ニューズ』と『コロムビア・ニュース』には、昭和何年何月にコロムビアの専属になったかという有力な情報が散見される。例えば希代のヒットメーカーである作曲家古賀政男については、「コロムビア専属作曲家新人 古賀政男氏を語る」(第二巻第九号)をはじめ、古賀政男「専属芸術家の随想―雨だれの音」(第三巻第七号)、「南風に送られて古賀政男氏病癒へて帰る」(第五巻第四号)が確認できる。まさに専属作曲家デビューから、コロムビアを去る直前の心身疲労を迎えた時期までを垣間見ることができる。

コロムビアの初期の作品を支えた歌手の江文也と関種子については、「新人・江文也さん 肉弾三勇士で突如現はれた この驚くべき多才振り」(第三巻第五号)、「関種子」吹込むまで」(同上)がある。古賀のライバルである作曲家江口夜詩の入社については、「新進作曲家佐藤行洋、江口夜詩の両氏を専属に加ふ」(第四巻第二号)が報じている。ビクターからコロムビアに移籍した芸者歌手第一号の藤本二三吉と、コロムビアが発掘した赤坂小梅と豆千代については、「新に専属になった藤本二三吉さん、赤坂の小梅さん」(第四巻第四号)、「艶麗明朗な美姫の出現、福小松の豆千代さん、愈々コロムビア専属として活躍」(第四巻第十一号)で取り上げている。

歌手の伊藤久男は昭和八年に専属になるもヒットに恵まれなかったが、昭和十五年には「高原の旅愁」や「暁に祈る」といった大ヒットを飛ばし、スター歌手の仲間入りを果たす。その新人記事が「新人歌手、伊藤久男、コロムビア専属となる」(第四巻第四号)である。一方でヒットに恵まれず短命に終わった上野静夫や青山薫については、「恋の舟唄」の名テナー上野静夫君専属となる」(第五巻第六号)、「明朗なる新人バリトン秋月直胤君専属となる」(第六巻第五号)で紹介している。後者の記事から秋月直胤が青山薫と改名した事実も判明する。

作詞家の久米正雄、久保田宵二、西條八十については、久米正雄「入社に際

して」(第五巻第九号)、「注目すべき作詩家久保田宵二君専属となる」(第六巻第四号)、「詩壇の重鎮西條八十氏専属となる」(第六巻第十号)で専属となった時期がわかる。また作曲家の竹岡信幸、明本京静、仁木他喜雄も同様に、「うら若き新進作曲家竹岡信幸氏我社専属として活躍」(第五巻第九号)、「一人で作詞作曲独唱の専属契約明本京静君専属となる」(第六巻第四号)、「能才として知られる仁木他喜雄君専属となる」(第六巻第五号)から判明する。

歌手の自己紹介的な文章にも、新たな知見が詰まっている。二葉あき子「レコードを通じて大衆と親しみたい」という寄稿文からは、昭和十一年にデビューした二葉の歌手としての想いを知ることができる(第六巻第四号)。当時は売り出し中であつたが、後年には知る人ぞ知る存在になってしまった歌手たちもいる。それが櫻井健二と島津英夫である。「我が名の由来」という特集記事では、櫻井健二「里見弾氏型」、島津英夫「いまだに未練あり」、豆千代「神様から……」と、それぞれ芸名が生まれた裏話を紹介している(第六巻第二号)。また櫻井健二は「吹込の感想」を語り(第六巻第四号)、新人歌手の素顔をうかがうことができる。

さらに「コンピを語る」という特集で、松平晃「満点の歌手豆千代さん」、豆千代「無邪気で朗かな松平晃さん」と題し、それぞれの人柄について述べているが、これも数少ない記録である(第六巻第二号)。淡谷のり子は複数の伝記を書き残しているものの、同じ洋楽調の歌手でありながら中野忠晴との思い出についてほとんど触れていない。その意味では「中野忠晴、淡谷のり子縦横談」(同上)は貴重な証言といえる。豆千代と作家の川口松太郎の対談をまとめた「川口松太郎と豆千代対談抄」も他では見られない内容である(第六巻第四号)。

作詞家西條八十と作曲家江口夜詩は、当時のコロムビアのドル箱的存在であった。両者は芸術使節に選ばれ、昭和十一年六月十一日に「詩と音楽の旅」と称する世界一周の旅行に出発した(『日蓄三十年史』株式会社日本蓄音器商

会、一九四〇年)。その旅行の模様について紹介したのが、江口夜詩「―詩と音楽の旅―桑港から倫敦まで」と、西條八十「巴里にて」である(第六卷第四号)。

コロムビアの社員の人事についても、「業界の練達松村武重氏文芸部長に、和田前部長は営業部附に転任」とあり、昭和九年四月中に松村武重が文芸部長に就任し、和田龍雄が営業部に移動したことがわかる(第五卷第五号)。和田の人事異動は古賀政男が退社してテイチクへ移った責任によるという話があり(古賀政男『我が心の歌』展望社、一九六五年)、「最近健康すぐれずそれがため文芸部長の激職に耐へず」という記述を額面どおり受け取ることは慎重になる必要がある。しかし、レコードの製作に影響力を与える文芸部長の人事に関する記述は少ないため、その交替時期がわかることは大きい。これだけでなくコロムビアの各支店長などの人事異動に関する記述も確認できる。

西條八十のように作品集や自伝があれば、その人物の出身地や専属になるまでの経緯はわかる。しかし、そのようなものがない歌手、作詞家、作曲家の情報を得ることは困難である。そうした基本情報を得ることができる。

楽曲が生まれた背景

専属芸術家の情報と並んで得ることが難しいのが、楽曲がどのようにして誕生したかという歴史的事実である。この手の史料となると、歌手、作詞家、作曲家などが過去を振り返る回想録のような記述が多い。そうなると記憶に残るヒット曲に関するものがほとんどであり、余程気に入っていない限り、ヒットしなかった作品について触れられることはない。『日蓄ニュース』と『コロムビア・ニュース』に掲載された作品に関する記述は、リアルタイム

のものであり、まだヒットするか否かが読めない期待に満ちている。

その一例が、昭和八年に新民謡ブームのなかで売り出した「東京祭」や「大阪祭」を紹介した記述である(第四卷第八号、第十一号)。「大阪祭」は十七万枚の大ヒットとなったが、「東京祭」とともに当時の新聞紙面では確認できない情報がかがえる。また「さくら音頭」の作詞家である伊庭孝が「一九三四年の歌としての「さくら音頭」を書いており、この作品に対する自身の思いが見て取れる(第五卷第二号)。「さくら音頭」に関しては、ミスさくらを選んでいたことや、各地で人気を博していた模様などもわかる(第五卷第三号)。昭和十年四月の「ハイキングの歌」については、「新人青山薫氏の第一声」という意味で宣伝紹介したものであった(第六卷第五号)。しかし、これはコロムビアからテイチクへと移籍した作曲家古賀政男の「ハイキングの唄」と対決することになったため、どのような意図で作成されたかがわかることは歌謡史の史料として貴重なものといえる。

雑誌の形態が月刊誌から季刊誌へと変った昭和十一年の第六巻を迎えると、作品の狙いや意図などを説明する関係者の記述が増える。昭和十一年三月二十日発売の「下田夜曲」については、「下田夜曲」のねらいごと」という特集を組み、作詞家高橋掬太郎が「僕の狙った味描いた夢」、ディレクターの市村幸一が「作曲に新味を」、作曲家竹岡信幸が「黎明をのぞみつゝ」、歌手の音丸が「唄ひながら胸せまる歌」という見出しで、それぞれの想いを寄せている(第六卷第二号)。

同号では同年四月二十日発売の「露営の夢」について作詞家久保田宵二が「露営の夢」の作詩に就て、作曲家江口夜詩が「作曲に就て」、同日発売の「夜霧朝霧」について作曲家古閑裕而が「一気呵成一夜で書いた「夜霧朝霧」、歌手の豆千代が「心はヤタケに逸れども」が見て取れる。また松平晃「若き日の胸」についても、作詞家久保田宵二が「若き日の胸」寸言」、作曲家竹岡信幸が「作曲の感想」を寄せている。同年からコロムビアの専属となった作曲家服部良一は、淡谷のり子「おしやれ娘」について「おしやれ娘」の作曲に就て」を説明する。作詞

家西條八十は「無言の握手感激の握手―さくら行進曲」の出来るまで」という裏話を紹介している。こうした記述は他では得ることのできない貴重な情報である。

グラビア写真の貴重性

『日蓄ニューズ』と『コロムビア・ニュース』の魅力の一つが、圧倒的な写真量である。「我が社芸術家の素晴らしい活躍(第三卷第十一号)の題名はなくても、毎号同じような歌手たちの舞台、レコード店の訪問、企画イベントなどの写真が数多く掲載されている。その集合写真には歌手だけでなく、作詞家や作曲家の姿を確認することもできる。レコード店を訪問した際の写真は店内の雰囲気を知ることができ、最終項で後述する風俗考証の有力な手がかりと言える。

『日蓄ニューズ』第一巻第一号から第九号までは表紙、第十号から第六巻第十二号までは内表紙に、コロムビア専属芸術家の写真が掲載されている。長唄の四世松永和楓、歌舞伎の松本幸四郎、女義太夫の豊竹呂昇、新内節の富士松加賀太夫、浪曲師の酒井雲、天中軒雲月、広沢虎造など、邦楽全盛時代を感じさせるスターの顔写真が確認できる。一方でバンドリーダーのポール・ホワイトマン、バイオリン奏者のヨーゼフ・シゲティ、ピアニストで作曲家のイグナツ・フリードマンなど、外資系レコード会社の香りのする外国人の姿も登場する。

日本の音楽界の旗手としては、作曲家の山田耕筰、音楽家のベルトラメリー能子、三浦環、原信子、バイオリン奏者の諏訪根自子などの写真が掲載されている。流行歌の世界では、作曲家の古賀政男、江口夜詩、佐々紅華、奥山貞吉、宮田東峰、古関裕而、竹岡信幸、明本京静、作詞家の西條八十、歌手の淡谷の

り子、川畑文子、赤坂小梅、藤本二三吉、松島詩子、松平晃、ベティ稲田、松原操、中野忠晴、分山田和香、音丸、秋月直胤(青山薫)、上野静夫が見て取れる(表参照)。

こうした写真の多くは昭和四十年代のLPから現在のCDに至る、SP盤の復刻全集の別冊解説書やジャケットの写真として使われている。昭和十一年に季刊となって流行歌に関する記述が豊富になる一方で、前年までの内表紙の専属芸術家の写真がなくなってしまったのは残念である。これが継続していれば、服部良一や二葉あき子など、その後にコロムビアの専属となった人物の綺麗で大柄な写真も見られたに違いない。

この切り取りが可能な内表紙の写真は、販促用のプロマイドにもなったようである。そのことは「コロムビア専属芸術家の四ツ切写真が出来ました」という記述からわかる(第六巻第三号)。「従来各位の店頭裝飾用並に御宣伝用としてコロムビア専属芸術家の美事なる四ツ写真を作製して居りましたが、今回左記の通り芸術写真追加致しましたから、何卒陸続御注文の程お願い致します」とあり、作曲家の竹岡信幸、ヴァイオリニストの諏訪根自子、松竹少女歌劇団の水の江瀧子、歌手の音丸などの名前が記されている。

そして「一枚 金二十銭でお頒ち致します」という。つまりコロムビアの四ツ切サイズのプロマイドは、特約店に宣伝用として無料配布したものではなく、各店舗が一枚二十銭で購入していたのである。これは戦前のレコード会社の販促用のプロマイドが意外にも確認できない理由として注目できる。

また「或る日の我社専属芸術家」(第三巻第十号、第六巻第十二号)は、『日蓄ニューズ』や『コロムビア・ニュース』に掲載する目的で撮影された写真とはいえ、自宅や外出先などプライベートな空間のため、専属芸術家の日常風景が感じられる。ここには戦後の『平凡』や『明星』のプライベートを演出した芸能人の姿に通じるものがある。

そしてグラビア写真の極め付けは、「コロムビア・メンタルテスト」で使わ

れたものだ。第六巻第六号と第七号では「懸賞コロムビア・メンタルテスト」という記述問題であったが、第六巻第八号の「コロムビア・メンタルテスト」では二十名の内六名を除いて目隠しをした顔写真(第十号では一名を除いて目隠し)から、それぞれの氏名を質問している。流行歌の歌手だけではなく作曲家や作曲家も含まれているため、かなり難問である。第九号と第十一号では目隠しはないものの、外国曲に関する外国人たちなので、やはり簡単ではない。最終問題となった第十二号では、古典的なクラシックの作曲家、邦楽や作家を混在させている。正直、『日蓄ニューズ』の創刊号から揃えて、それに掲載された写真を丹念に見ていかないと答えられなかっただろう。

邦楽と洋楽の消費者嗜好統計

レコード会社にとって売れ筋のデータ解析は生命線である。そのため邦楽と洋楽のいずれが好みか、東京、京都、大阪をはじめ、大都市における消費者の統計を取っている。戦前と戦後とは大きく大衆の音楽に対する好みが変わるが、「六大都市に於ける邦楽嗜好状態の比較―興味ある事実が現れてゐる」からは、戦前に邦楽の人氣が高かったことがよくわかる(第五巻第七号)。これは昭和九年六月の統計だが、この頃に「ハア小唄」や股旅任侠路線など邦楽を取り入れた流行歌が多く作られた理由が見えてくる。同年九月には「第二位六大都市に於ける邦楽嗜好状態調査―広島・福岡・長崎・函館・仙台・札幌の」に調査対象を拡大している(第五巻第十号)。

その一方で「六大都市に於ける洋楽嗜好状態の比較―断然横浜が第一位」という邦楽嗜好との比較対象できる統計を取っていることが貴重である(第五巻第八号)。東京はジャズで第二位であるものの、洋楽全般では大阪に次ぐ低位であり、人口数に対して一般に洋楽が浸透していないという。同年十一

月には「第二位六大都市に於ける洋楽嗜好状態調査―洋・邦楽を通じて長崎が第一」を報じている(第五巻第十一号)。これらの統計は、二十五歳以下から六十代までの嗜好比率もわかり、この時点での邦楽と洋楽との人気ジャンルを知る上でも、目から鱗の史料といえる。

これまで戦前期のメディア研究では、通信省電務局業務課「ラジオに関する調査」、総務局計画部調査「慰安演説の放送編成回数調」、昭和九年度投書内容調査第三次報告、総務課計画部「投書調査「慰安に関する事項」(南博編『近代庶民生活誌』第八巻、三一書房、一九八八年)によるラジオ聴取者の嗜好に関する記録が使われてきた。コロムビアの邦楽と洋楽の嗜好調査統計は、ラジオ聴取者の音楽に対する嗜好性に重ねて考えることのできる数少ない手がかりである。またレコードに関する嗜好性を裏付ける貴重な史料と言える。

レコード店とコロムビア社内の風俗考証

『日蓄ニューズ』や『コロムビア・ニュース』には全国各地のレコード店の写真が散見される。接客に利用するカウンターをはじめ、カウンター背面の棚や、店内でレコードを収納している引き出し、蓄音器の配置など、それぞれの店の様子が色々と見て取れる。また店内でレコードを収納する戸棚の引き出しのデザインは、第三巻第十号の表紙ではつきりする。中央にコロムビアの音符のマークが付き、その左右の白地にレコードの番号が記入されており、客の求めるレコードがすぐに探し出せるようになっている。

レコード店内の陳列棚や飾り方など、特約店に有効だと思われる情報も提供していた。銀座堂の五十嵐耕一「レコードを売るまで―その一考察」(第三巻第五号)、川喜田煉七郎「店内の家具設備について」(第四巻第五号)、同上「店内家具設備について」(第四巻第六号)、浜田増治「陳列窓装置の形式

と要領」(第五卷第九号)、「ショーウインドの飾り方」(第六卷第六号、第十二号)などである。これらを読むと、当時のレコード店に勧める最新の形式を知ることができる。

コロムビアの社内風景については、考現学者の吉田謙吉「レコード考現学―文芸部訪問記―」の記述から知ることができる(第五卷第九号)。「練習室」「第一吹込室」「第二吹込室」の絵図に加えて、歌手や演奏家の吹込風景の図が添えてある。同上「レコード考現学(二)―総営業部訪問記」では、「会議室」「宣伝部」「営業部」「副社長室」の絵図を入れて、それぞれの特徴について説明している(第五卷第十号)。同上「レコード考現学(三)―工場訪問記―」では、工場に従事する人たちの服装や作業工程について紹介する(第五卷第十一号)。

このうち工場での作業については、「コロムビアレコードが出来るまで」(第四卷第四号)という、録音から工場でレコードがプレスされるまでの工程を写真で追った貴重な記録と重ねて読むとより理解が深まる。福島市古閑裕而記念館には古閑裕而が撮影したコロムビアの「RECORDOが出来るまで」というフィルムが残されているが、それとともに戦前期のレコード製造の過程がうかがえる数少ない史料である。

これらの記述と写真を丹念に見ると、昭和戦前期のコロムビア社内や工場、各レコード店を見学した気分になれる。現在では行って確かめることのできない風俗考証に役立つ史料と言える。